

史料紹介 『和泉流狂言太夫野村家由緒』

関屋 俊彦

はじめに

標題に掲げたものは、平成廿年秋の東京古典会で出品されたものを関西大学図書館に入れることができた。狂言和泉流の野村又三郎家十代目信英が明治四十年十二月に相続した時のもので新出の史料である。以下、「関大本」と仮称する。

併せて、野村又三郎を名乗られた方の最新刊『我、狂言たれ』についてコメントを加えるものである。なお、奥書は西暦か和暦に統一すべきかも知れないが、転記の際の誤りも起こり得ることを考慮して、もとのままにした。

第一章 書誌的なことも

野村又三郎家については、私は以前「狂言師野村又三郎家家

系考」として『武庫川女子大学紀要』廿五集（昭和五十三年二月・武庫川女子大学、のちに拙著『狂言史の基礎的研究』和泉書院に所収）に書いたことがある。その際「野村家系譜」（雑誌『能楽』明治四十四年四月号に翻刻）と「野村家由緒之事」（鶴舞図書館蔵『名古屋人物史料』二十六所収）を使ったのだが、九代信茂の代までのものであり、全文を紹介した訳ではない。古川久・小林資両氏編『狂言辞典 資料編』（昭和六十年十一月・東京堂出版）には「狂言諸家系譜」があり、三流十九家一団体の系譜が掲げられているのだが、その凡例に「和泉流野村又三郎家の累代については不審がある」とした上で「狂言辞典事項編」と拙稿を参照されたいとして保留されている。その後、飯塚恵理人氏が『近世能楽史の研究―東海地域を中心として―』（一九九九年・雄山閣出版）に「藩士名寄」を紹介してもいるのだが、野村又三郎家に関しては断片的なものである。今回、新

史料が出てきたことをきっかけに野村家由緒書を特に累代を確定させたいと思うものである。

翻刻にあたって旧字体・異体字は通行の書体に直し、句読点等の記号に類するものは任意にうった。「」は割注である。また、比較のために、現在は『名古屋市史資料影印叢書』として閲覧可能な名古屋市鶴舞図書館蔵のもの（「鶴舞本」と仮称）との校合（甚だしい異同部分のみ直前の文字との校合を「」で示した）を行ない、異同の多い「野村家系譜」（「雑誌本」と仮称）は別扱いとして紹介する。関大本の簡単な書誌は次の通りである。

写本袋綴一冊。二四・二×一六・六センチ。全九丁。外題「和泉流狂言太夫野村家由緒」。

奥書「十代目 先代の実子又三郎信英、幼名廣之助、明治四十年十二月跡相続す」。

第二章 本文翻刻

A 関大本（鶴舞本との校合）

野村家由緒之事

野村家ハ丹後宮津の郷士なり。慶長三年肥後細川公ニ随ひ熊本

二下り、其後、元和八年戌年、京都に上り、室町中立売に住居す。専ら呉服商を営み、細川家の御用達をつとむ。是、重信又三郎（「又三郎」なし）以前の代なり。
重信以前二元信・義信の二代、古記に見ゆれとも、重信を以て、野村家狂言太夫の祖となす。

初代 又三郎重信

当代より京都一条松の下に住居し呉服商たり。幼年より狂言の上手候に【にて】細川家ハ勿論、宮家、公家に御出入し、狂言を【相】勤む。或年、近衛家より御召により【御召之節】尾州家御抱の能役者、和泉流の家元山脇和泉守の相手を致す。此時より和泉家の門人となる。其後、師ニ随ひ、尾州家の御能ニ御雇として度々【毎度】御用を【相】勤む。

寛文三年（靈元天皇御即位式）禁裏御能の節、三番叟相勤め、後朝ニ花子を勤む。前後、稀なる出来ばへ【え】なりとて、時の御能奉行、風早実雅卿より御感状を頂戴す（軸と【な】補う）し、家宝とす。此時、用ひたる黒式面（聖徳太子御作）御所望ニより天覧に供し奉る。御下【け】補うの時、御衣の裂二品をたもふ【賜ふ】。即ち面蒲団是なり。

正徳元年七月四日、近衛家より【御能】補う御召の處、病中に付、御断申上之處、是非御【御】なし。出勤致すべく再三御

下命により余儀なく【無余儀】出頭し、宗論を勤む（浄土僧の役）狂言中、即滅無量罪と【いふ】云時、瞑目したるま、即死す。（病氣【中】として家ニ下る）悻信之替りて狂言相つと【勤む】。

正徳元年七月四日行年七十一才【歳】

延替高山道壽居士

二代目 又三郎信之

正徳元年七月相続。初代存命中より父ニ随ひ、再度、尾州家始め諸公家の御用を勤むる事、父ニ同し。享保五年五月四日死去。

法替實窓道堅居士

三代目 又三郎信明

丹藏

正徳三年【三月】補う。丹藏時代より尾州家へ御召抱となる（前式代ハ御雇として御用を承る【御用相勤】。当代より【専ら】補う）尾州家【尾州】御抱の【御抱】能役者となる）。

享保五年、先代死去跡相続。又三郎と改名す。享保十六年四代目和泉死去。五代目和泉（八才【歳】）若年ニ付、芸事後見仰付らる【被仰付】（五代目和泉ハ元喬、弁藏和泉なり）。此功ニよリ【此人家元取立の故にて】十石御加藏となる（最初廿五石、後二【二】なし）三十五石）。延享元年【子】補う。八月十三

日死去。江戸より帰路、駿州【河】吉原宿ニて【三於て】死去。同所妙禪寺【院】ニ葬る。

清輝院道桂居士

四代目（先代信明の甥

磯野家よりの【の】なし）養子）

又三郎信幸

延享元年跡相続。

寛延二年己十一月二十六日死去。

受楽院隨【道】常居士

五代目（三代目信明の弟

小三郎の子なり）

又三郎信成

寛延二年十一月先代跡相続。

宝暦十三年癸未正月四日死去（江戸表ニ於て）。

江戸牛込原町恵光寺ニ埋葬す【法名のあとに記す】。

是法院宗信居士

六代目 先代の実子なり【なり】なし）

又三郎信興

幼名丹藏

宝曆十三年二月先代跡相統。

文化十三年亥十二月六日死去。

量松院實蒼延壽道應居士

七代目〔実子養子 不明〔実養不明〕〕

又三郎信名

幼名栄治

文化十三年相統す。

文政四年七月二十四日死去（早世なり、行年二十七才〔歳〕と伝ふ）。

松樹院徳舉〔譽〕義董〔蕉〕道英居士

八代目 又三郎信喜

幼名惣三〔二〕郎

七代目又三郎信名子無〔き〕補う。故二、六代目又三郎信興の弟子に浅井惣三〔二〕郎と云〔ふ〕補う。芸事の名人を撰ミ養子とす。

文政五年閏正月、七代又三郎の跡役相統〔被仰付〕。

安政四年巳閏五月十八日死去〔す〕補う。

笑々菴通舉〔譽〕道喜居士

九代目 先代の実子

又三郎信茂

幼名〔初〕小十郎

当代より大阪ニ住居す。

安政五年閏五月跡相統す〔跡役相統〕。

明治四十年十二月三日死去。行年七十三才〔歳〕。

關教院彰舉〔譽〕達道信茂居士

十代目 先代の実子

又三郎信英

幼名廣之助

明治四十年十二月跡相統

〔右師匠家之古書類を取調へあらましを記し置。〕

大正三年五月

九代目又三郎弟子

河村鍾三郎（花押）

野村家代々の墓所

京都上京区一条淨福寺通り

淨福寺〕補う。

B 雑誌本

○初代野村又三郎元信 丹後宮津郷士にして、元和八戌年京都に出で、室町中立売に住居し、呉服商を営む。細川侯御用を承り、一条松の下町へ移住す。能楽に志し、殊に狂言に達せり。行年七十五歳にして終る。

○二代重信、寛永廿年に生る。幼少より殊に狂言を好み、年十五歳にして堂上方に出入し狂言を勤む。別て近衛公の引立を蒙れり。細川家用達にて肥後熊本に下り、以来、御抱へ役同様御用を勤め、同地にて野間善左衛門、小早川小三郎、兩人を職分に取立つ。其当時、京阪地方、其他諸國に門人五百余名あり。慶安貳丑年、近衛公、山脇和泉及び重信兩人を召し、狂言を被仰付、重信、和泉殿に相手を勤むる初めなり。然るに格別近衛公御意に相叶ひ、兩人に褒賞を給り、其後、和泉殿と別懇に相成り、芸事上秘事伝授等を談合し、此年、和泉家隨身となり、尚、野村家取立、弟子共は中伝迄、野村家にて免許状を出す家格となる。宝永三卯年、人皇百十三代靈元天皇御即位の節、禁裏にて三番重相勤め、後朝、花子狂言被仰付、首尾能く相勤め、其当時、御能奉行風早実種卿を以て、御感状を給る。尚、其節、野村家伝来黒色面、内裏より御所望相成り、天覧被在候處、古作なりと御沙汰有之、御衣の袈二品拝領をなす。即、黒色面蒲団に仕立つ。此面は聖德太子御作なり。元禄七戌年尾州家へ罷下り、狂言相勤め候節、現米六拾石にて御抱の御沙汰有之候處、子細ありて御断り申上げ、其代りとして、其頃、京阪弟子の内にて、吉村市郎右衛門、安田嘉左衛門、安田儀兵衛を推挙し、各三十石宛にて召抱へとなる。正徳元卯年七月四日、近衛公御

能催し、其砌、出勤すべく御下命有之候處、病中の故以て、御断り申上候得共、是非出勤せよとの御事に付、狂言宗論にて浄土宗僧の役、問答中、即滅無量罪と称へ、手を合して瞑目す。急病差起り候と披露し、装の儘、近衛家御召用アジロ籠に乗せ、引取り往生す。行年七十一歳なり。

○三代信之 享保五庚子年、五月四日没す。

○四代目信明 幼名丹藏重信の甥なり。正徳元卯年、尾州家兼覺院様御代、御国表へ下り、狂言相勤む。正徳三己年三月より尾州家御抱へとなる。未だ若年の故を以て、追而、御加増の約にて御切米廿石、御扶持方江戸五人分、尾州三人分を下し置る。享保十亥年、四代目和泉殿病死。五代目和泉殿若年に付、後見仰被付らる。延享元子年四月拾石御加増被下、延享元甲子年八月十三日、江戸表より登る砌、道中吉原にて病死。同地妙祥院へ土葬す。

○五代信幸 前名小三郎信明の弟なり。寛延二己丑年十一月廿六日、京都にて没す。

○六代信成 前名小十郎信幸甥なり。宝曆癸未年正月四日、江戸にて没す。

○七代信興 初名藤吉・丹藏と改名し、跡目相続、又三郎と改む。信成の子なり。文化十三乙亥十二月六日没す。行年七十一

歳なり。

○八代信名 前名栄次。文政四己年七月廿四日没す。行年廿七歳なり。

○九代信喜 前名惣次郎。安政四己年閏五月十八日午の刻没す。

○十代信茂 前名小十郎。信喜三男なり。天保七申年八月十八日生る。明治三千年、廢藩の爲め尾州家切米扶持共奉還す。明治四十年十二月三日没す。行年七十二歳なり。

○十一代当代又三郎信英

第三章 野村又三郎信英のことども

「関大本」は、奥書にあるように明治四十年十二月に十代信英が写したものである。どうやら、いわゆる「由緒書」が記されるきっかけは代替わりに書かれるようである。

次に「鶴舞本」と比較してみても大きく変わっている部分が奥書で、大正三年五月に信英の弟子河村鍵三郎が書き写していることがわかる。しかし、それ以外は「関大本」と校合してもほとんど変わらない。むしろ「関大本」の用語の乱れを訂正している。「関大本」とは親子関係にあたる。いちおう花押が入って

いるので「名古屋市史」編纂の時、河村が請われて信英から転写したものとしておきたい。なお、新野村又三郎氏の「我、狂言たれ」（後述）「先祖の由緒書き」には「私の手元に弟子家に伝わっていた大正十三（一九二四）年の「由緒書き」があります。私の祖父が書いたものの写しで、過去帳を兼ねた系図のようなものです。ほかのご先祖による由緒書きもあつたはずですが、震災と空襲で残っていません」とある。大正十三年は三年の誤植かも知れないが、いずれにしても河村鍵三郎の手になるもので同内容であろう。

次に「雑誌本」であるが、これも信英の時、明治四十四年に紹介されたようである。しかしながら重信の項での尚書で靈元天皇即位の際に賜った黒式面や弟子衆のことがやたらと詳しい。当該雑誌には乙御前と鼻引そして黒式面の写真まで掲載されている。そこで、当然、問題になつてくるのは「関大本」との先後関係である。私は、やはり「関大本」の方が先であると考え。雑誌「能楽」で紹介する際、尚書を付け加えたものであろう。ある意味、権威を持たせるためであつたかも知れない。初代を元信としたのも家系上一代でも古くみせたい心情は、よくわかる。「狂言辞典資料編」で「野村又三郎家の累代」については「不審」とされたが、初代は「重信」でよい。河村鍵三郎の写し

たものが証拠ともなる。

さて、この由緒書の当該者野村又三郎信英についてだが「狂言辞典 事項編」(昭和五十一年・東京堂出版)が要を得ている。これを年譜仕立てにすると次のようになろうか。勿論、詳細な舞台記録等は今後の課題としたい。

慶応元(一八六五)年三月十五日 京都で生まれる。九世又三

郎信喜長男。初名、広之助。

明治三(一八七〇)年 京都今宮神社神事能(伊呂波)のシテで初舞台。

父と共に大阪に移る。

明治四十(一九〇七)年十二月 父逝去。又三郎襲名。

大正 六(一九一七)年 上京。中京地区へも出稽古。

昭和三(一九二八)年 一時帰阪するも以後、東京に定住。

昭和十六(一九四二)年 家元山脇元康と不和になり一時破門される。

昭和廿(一九四五)年一月十五日 後継の三男信広出征中逝去。

法名「寂靜院観普信英居士」。菩提寺京都市浄福寺。

第四章 野村又三郎著「我、狂言たれ」について

野村又三郎信行氏が最近「我、狂言たれ」又三郎家の楽屋裏でござる(二〇一一年五月廿九日・風媒社)を出版された。父君信広氏をなくされ、襲名の意味を込めて出されたものであろう。形を変えた現代の由緒書といってもよい。信英についても祖父として遺影が載せられている。それはそれでまことにありがたいがたく慶賀なことなのだが、又三郎家について記されている「先祖の由緒書」などに、どうにも気になる箇所がある。古典芸能離れをしている若者向けの書といえ、それまでなのだが、彼が人気役者の道を歩もうとしているだけに困ることである。

私が先代の又三郎氏にお会いしたのは、やはり「武庫川女子大学紀要」に書く前に御自宅に伺ったので昭和五十二年のことになる。舞台で拝見した通り、実に穏やかな人柄であった。失礼ながら逼塞しているといってもよいくらいであった。名古屋は狂言共同社(和泉宗家の弟子集団という成立過程を持つが、今は独立した存在となっているようだ)の活動が盛んで、又三郎氏が共演することはあまりなかったからではあるまいかと密かに感じていたことである。その時、大声を出しながら走り回るやんちゃな男の子が居て、父君は強く叱る訳でもなく、子煩

悩だなど思ったものである。それが今の又三郎氏であった。せっかくながら貴重な史料を拝見しながら、その後、それらを活かすこともせずに見送ってしまったのは申し訳ないことである。私自身がほかのテーマすなわち大藏流などに心移りしたこともあるが、林和利氏や飯塚恵理人氏が名古屋に住まわれることになり、名古屋のことは、彼らに任せて、もう手出しすまいと思つたこともその原因のひとつであつたかも知れない。

新又三郎氏は、舞台の藝の方は評判もよい。しかし、名古屋ではどうだろうか。さらに、この本がひとり歩きするようになると困る。時々卒業論文で国語学も含めて、ある役者の本が通説だと思ひ込んでいる学生が増えてきて、現場では困つてしまふ例も見受けられる現状なのである。インターネットの垂れ流し情報の時代になつたとはいへ、本を出すことは、今だにそれだけ影響力が強いことを認識してもらいたい。新又三郎氏にはブレーンを持ってもらいたい。野村萬氏に田口和夫氏、狂言共同社に林和利氏、山口鶯流狂言に稲田秀雄氏がいるような研究者との関係を望む次第である。能楽学会は、研究者・演者・観客の三位一体を目指して発足した。手を携えていかなければ、益々古典芸能離れは進んでいくであらう。そうした願いを込めて以下、書いてみる次第である。

一、p 60「光を当てたい二人の先祖」で、野村又三郎家の文書が関東大震災や太平洋戦争で、ほとんど失われてしまったのは、まことに残念である。家の根本史料である由緒書すら弟子が写していたものを転写していることは先に述べた。元信と義信のことについては、私も今後調査を続けたい。細川公に仕えていたというのが手懸りとなるのかも知れない（細川幽斎は丹後田辺城にかかわり、細川玄又は、同じく丹後に庵を持つている）が、今のところ由緒書を重視して重信を初代と看做さざるを得ない。

なお、今回、改めて由緒書を読みなおした訳だが、代々の墓は京都淨福寺でいいのだが、墓が散らばっている場合もある。三代目が駿河妙禪寺、五代目信成が瑞光寺（恵光寺乃至専光寺ではなく瑞光寺であつたことについては、「観世」昭和五十二年六月号で「掃墓」に短文ながら紹介したことがある）である。お墓の問題だけにいささか気になる。

二、p 64「御抱と禁裏御用、実はスパイ？」の見出しで「あくまで私の個人的な推察ですが、重信は一種のスパイだったのではないかと思つています」とあるのは、いかがなものか。

和泉流は、山脇家を含め「御所御用」だったのである。それが誇りだったのである。拙稿を読んでもらえればよいのだが、

又三郎家の機関誌「やるまい会」二号（昭和五十七年五月）にも先代又三郎氏に依頼され「野村又三郎家について」を書いたことだし、何より「京都新聞」昭和五十一年四月二十三日「芸能史研究事始・和泉流家系考」を書いた時、副題として「誇りを支えた御所勤め」を、これは記者の方で考えてくださったものだが、本質を突いていて、私も好んで使っている。まさに和泉流は「御所御用が誇り」であつたのである。ひらたくいえば天皇や公家が役者に給料など支払えるはずがない。与えたのは名譽Ⅱ官位で山脇五郎左衛門も最初は名前だけでしか呼ばれず、そのうち、近衛家に入り、石見守と付けてもらつていたのが、のちに和泉守になつた。実際は、養つたのは有力大名なのである。加賀藩しかり、尾張藩しかり。初代重信などは、むしろ当初、尾張家召し抱えを断つて、近衛家に最期まで純情なまでに尽くしている。徳川幕府が狂言師にスパイを期待するほどのことではない。既に「禁中並公家諸法度」の威力は至るところに巢食っている。観阿弥の系譜が南朝方のスパイだつたという偽文書に踊らされた梅原猛節を表章氏が徹底的に否定していることも思い併せられる。その二の舞を新又三郎氏には、してもらいたくない。御所人形の写真を初めて拝見したが「御所御用の誇り」を忘れてもらつては困る。

p 80「四百年続く本流」で「よその家と違つて珍しいのは、本流しか表に出ていないこと。要するに当主筋の伝承だけが残つていて、亜流が見当たりません」とされるのは、いささか危ない方向の考え方である。それが寄つて立つ誇りであればよいが、古典芸能継承者で古典を継ぐというだけで横柄に構える姿勢になつてはならない。藝の道は厳しい。実るほど頭を垂れてもらいたい。当人が偉いのではない。能楽が素晴らしいのであつて、世阿弥を始めとした先人が偉かつたのである。また、能楽は変化してきたからこそ現代に残つた。

私は長年家系考をやつてはいるのだが、実子で継いでいつた場合は、ほとんどない。野村又三郎家の場合も由緒書で見るとに養子で繋いでいる。古典芸能を継ぐ家の方で、何百年も命脈を保っている者は少ない。せいぜい爺さんの代に小金を持つていた者が趣味で行なつていた能楽を続けたにしか過ぎない場合が多い。

あえて答を出すとするれば、宗家意識は日本人の好むところなのか、近世を通して野村又三郎家は和泉宗家の弟子ということから成り立っているものであろう。あるいは、氏は茂山家の場合を念頭に入れておられるのだろうか。千五郎家八世久蔵英政がなくなつたあと、高弟の千五郎・忠三郎の両家が独立した。

和泉流には同姓の野村万蔵家があるのも勿論家系は繋がっていないのだが、今後、考えてみる余地はあるのではあるまいか。大蔵家も伝承では大久保家とその影家紋の家柄であつたとする。

狂言は能と共にあり、散楽Ⅱ雑芸が式楽化され、様式美を完成させた。能と異なる点は「笑い」が根幹にあり、それも多くは庶民の生活を反映している。その人間的な庶民の立場を忘れてもらつては困る。関西での一部の能役者は客をとらんがためにドタバタ喜劇の方向に走ろうとしている。大蔵虎明が「わらんべ草」でいうよう、最近の能の方が狂言に近くなつてゐる。庶民性といつても品位が大事である。東京と大阪はよく両端だと比較されることが多いが、中間にある名古屋は両方のよいところを取つて欲しい。

なぜ、家を守るのか、どうすれば家が守れるのか。本当の人たるとは何か。世阿弥も言っているではないか。

家、家にあらず、継ぐを以て家とす。人、人にあらず、知るを以て人とす。

〔花伝〕別紙口伝

(せきや としひこ)／本学教授